

# 神戸女学院創立140周年記念行事

## レクチャー・コンサート

～スクエア・ピアノで聴く明治期神戸の演奏曲～

津 上 智 実

皆様、こんにちは。

今日は、神戸女学院に伝わる貴重な楽器スクエア・ピアノについてお話を致します。皆様の目の前のこの楽器が今日の主役です。「四角いピアノ」なので「スクエア・ピアノ」と呼ばれます。この楽器はニューヨークのスタインウェイ社が作ったピアノで、製造番号が4444番であるところから、1860年に作られたことが分かっています(4444番という製造番号は、楽器内部の左脇に刻印されていますので、興味のある方は後でご覧になって下さい)。1860年と言えば、今から155年前のことです。このピアノは、日本最古の演奏可能なスタインウェイ社のスクエア・ピアノとして、大変貴重なものです。

楽器の大きさは、間口2メートル、奥行98センチ、高さ95センチで、蓋を閉じるとテーブルとして手頃な大きさです。素材は本体の木部は柘植、鍵盤の白鍵は象牙、黒鍵は黒檀で作られています。鍵盤の数は、今日標準の88鍵<sup>①</sup>よりも6鍵少ない82鍵です。音域は下のCから上のAまで [C1～A7]、6と4分の3オクターブとなっています。

この楽器が女学院に到着したのは1890年(明治23)1月21日、今から125年前のことです。当時の女学院は、ここ岡田山ではなく、神戸の山本通にありました。音楽教師として前年9月に着任したメアリー・ラドフォード先生は、赴任に当たって女学院にピアノを持参するため、故郷カナダのモンリオール<sup>②</sup>で教会の婦人会に呼び掛けました。するとチャイルズさんという80代の女性が、亡

くなったお嬢さんの形見のピアノを提供して下さいました。チャイルズさんは「自分の娘を日本に嫁に出す気持ちです」と言って、送料18ドルも寄附して下さいました<sup>③</sup>。カナダから日本への送料は33ドルで、不足分は婦人会の献金によって賄われました。多くの人々の善意に包まれて、日本へとやってきた楽器です。

スクエア・ピアノは、18世紀の半ばにドイツで発明されてから大変な人気を博し、モーツァルトがその人生で初めて弾いたピアノもスクエア・ピアノでしたし、スタインウェイ社が1866年に製造したピアノの内、97パーセントまでをスクエア・ピアノが占めていました<sup>④</sup>。しかし20世紀に入ると、アップライト・ピアノとグランド・ピアノに押されて、スクエア・ピアノは次第に使われなくなりません。

戦後、このピアノは音楽館のレッスン室に置かれていました。始めはヴァイオリンのレッスン室<sup>⑤</sup>に、その後、35室の壁際に置かれて、長らくテーブルとして使われていました。35室は代々ピアノ科の先生の研究室で、土肥みゆき先生、奥村智美先生、池田洋子先生、山上明美先生と引き継がれて、現在は田中修二先生の研究室になっています。

斉藤言子先生の話によると、皆これをテーブルだと思っていたので、クロスをかけて、この上で平気でお茶を飲んだり、水の入った花瓶を置いたりしていたそうです。今聞くと驚きますが、でもそうやって日常的に使われていたお蔭で、カビも生えず、ひび割れもせず、良好な状態で今日に伝えられてきたと言えます。「人生、塞翁が馬」というところでしょうか。

このテーブル型のピアノは、1992年にスタインウェイ代理店の松尾楽器関西営業所によって復元されて、楽器として甦りました。1992年3月4日に、客員教授のゲーリー・スマート先生によって披露演奏会が行われて、多くの報道陣が集まったのをご記憶の方もいらっしゃるでしょう<sup>⑥</sup>。その後、このピアノは図書館本館ロビーに置かれていましたが、3年前にこのめじらウジに移されて、今に至っています。

今年155歳のピアノで、めでたい長命ですが、それだけに難しい面もあります。それを実感して頂くには、ちょっと目をつぶって音を聴いて頂くのがよいと思います。皆様、では目をつぶって、これから鳴らす音が何の音か、当ててみて下さい。(Fの鍵盤を弾く)

はい、何の音でしょう？ 今、「ミ」と言った方は絶対音感がある人で、正解です。でも目を開けて見て頂くと分かりますが、今私が弾いたのは、ミではなくファの鍵盤です。(もう一度Fの鍵盤を弾く)つまりこの楽器は、木部が老朽化しているために、弦を十分に強く張ることができず、そのために全体のピッチが半音低いという問題を抱えています。このため、ト長調(つまりシャープ1つ)の曲を弾くと、聴こえてくるのは嬰へ長調(つまりシャープ6つ)の音ということになります。演奏者は、見ている楽譜と動かす手はシャープ1つの世界なのに、聴こえてくるのは全部半音下のシャープ6つの世界ですから、その間の読み替えをものすごいスピードで行うことになります。これは現代ピッチで鍛えられて絶対音感のあるピアニストにとっては大変な作業で、暗譜した曲をこのピアノで弾くと気が狂いそうになると言う人もいる位です。

それでは、この楽器が女学院で活躍していた頃の演奏曲を聴いてみましょう。

最初の曲はベートーヴェンの「月光」です。この曲は明治20年代から英語のリーダーの教科書でトピックとして取り上げられ、その後、尋常小学校の国語の教科書にも載ったので、当時の日本で最も有名な西洋曲となりました。お手元のプログラムの図版8番は、その最初の頁で、「第9課、月光の曲」とあるのが読めます。

この曲は、女学院でも教えられていました。図版5番は本学に残る音楽部レッスン帳の一部ですが、右下の「1911年冬学期」のところに「ベートーヴェン、ソナタ、作品27の2、Moonlight」と書かれています。

では、お聞き頂きましょう。ベートーヴェン作曲ピアノ・ソナタ第14番、嬰ハ短調、「月光」、作品27の2より第1楽章、演奏は大学院音楽研究科2年生の楠原結実さんです。

(演奏)ベートーヴェン「月光」第1楽章(5'34")

2曲目はシューマンの〈夕べに〉です。この曲はエリザベス・タレー先生<sup>⑦</sup>が、1908年の冬学期に小倉末子にレッスンした曲です。お手元の図版6番がタレー先生です。タレー先生は神戸女学院着任から10年かけて、1906年に音楽科を創設した功労者です。一方の小倉末子(1891~1944)は本学27回生<sup>⑧</sup>、音楽科の3回生で、ベルリン留学を経て、花形ピアニストとして活躍し、東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)のピアノ教授となりました。小倉は8歳の時からタレー先生にピアノを習い、1921年に恩師が亡くなると、翌年、本学講堂で「恩師ミス・タレー記念音楽会」を行いました。図版7番は、その様子を知らせる『めぐみ』の臨時号です。これを見ると分かるように、小倉末子はベートーヴェンの「月光」ソナタに始まって、ショパンやブラームスなどを弾いています。決算報告には650円の純益が上がったことが記されており、これは学院へ寄附されて、キャンパス移転のための敷地購入資金の一部となりました。

では、お聞き頂きましょう。シューマン作曲《幻想小曲集》作品12より第1曲〈夕べに〉、演奏は同じく大学院音楽研究科2年生の浅井久視子さんです。

(演奏)シューマン〈夕べに〉(3'31")

タレー先生が目を痛めて1909年に女学院を退いた後、レッスンを引き継いだのはシャーロット・デフォレスト先生<sup>⑨</sup>でした。図版5番の一番上を見ると、真ん中に「Ogura Suye, continued」とあり、その左に小さく「C. B. De Forest」と指導教員名が書かれています。デフォレスト先生は音楽好きの一家に育ったお蔭で、ピアノ、オルガン、マンドリン、ギターなどを弾き熟したことが、当時の記録から浮かび上がってきます。図版3番は1910年の新聞記事で、一世を風靡したソプラノ柴田環(後の三浦環)が、神戸の慈善演芸会に出演して、「ドシン作曲デポコパア」(これはロッシーニ作曲の有名なアリア「今の歌声は」Una voce poco fa)を歌ったことを伝えています。最後に「尚伴奏者ミス・デ

ホレスト嬢も亦共に好評を博せり」と特記されていて、ピアノが上手だったことが伝わってきます。

図版4番は、1910年2月26日に本学講堂で行われた音楽演奏会のプログラムで、下の段の15番に、ピアノ独奏で2曲、ミス・デフォレストとあります。その2曲目、パデレフスキのメヌエットは、デフォレスト先生のサイン入りの楽譜が今も音楽図書室に残っています。

では、この曲をお聞き頂きましょう。パデレフスキ作曲〈古風なメヌエット〉作品14-1、ト長調、演奏は同じく大学院音楽研究科2年生の古川莉紗さんです。

(演奏)パデレフスキ作曲〈古風なメヌエット〉(4'14")

お手元の図版の2番は、神戸山本通のキャンパスに建てられた音楽館の全体像で、その上の大きな写真、図版1番は音楽館の入口での集合写真です。この集合写真がいつ撮られたものか、記録がないので定かではないのですが、図版4番のプログラムの出演者とよく一致するので、この1910年2月の演奏会の前後に撮った写真ではないかと考えています。前列左から2人目がデフォレスト先生、後列左から3人目が小倉末子で、日本人としてはただ一人、洋服を着ているのが目を引きます。

では、小倉末子がデフォレスト先生のレッスンで学んだ曲からお聞き頂きましょう。ベートーヴェン作曲ピアノ・ソナタ第8番、ハ短調「悲愴」作品13より第2楽章、演奏は楠原結実さんです。

(演奏)ベートーヴェン「悲愴」第2楽章(4'52")

図版5番のレッスン帳を見ると、小倉末子はデフォレスト先生の元でヴァーグナーやベートーヴェン、メンデルスゾーンやショパンと幅広く勉強したことが分かります。右上の1910年春学期の欄を見ると、「memorized」あるいは省

略して「mem.」とあるところから、ヴァーグナーの〈パルジファルへの前奏曲〉や、今聴いて頂いた悲愴ソナタのアダージョを暗譜したことが分かります。1910年の秋学期には、当時まだ40代で存命だったドビュッシーの〈雨の庭〉や、3年前に亡くなったばかりのグリークの作品なども取り上げられています。当時としてはバリバリの現代曲が教材として用いられていたことになります。

では、その中からお聴き頂きましょう。グリーク作曲《詩的な音の絵》作品3より第2曲、演奏は古川莉紗さんです。

(演奏)グリーク《詩的な音の絵》第2曲(2'29")

レッスン帳を見ると分かるように、小倉末子はデフォレスト先生の下でショパンのノクターンやバラードも学んでいます。図版9番は1930年の『めぐみ』に掲載された学生劇の台本です。「院長先生音楽教師時代」の登場人物は「デフォレスト先生、小倉末子さん、一柳まきさん、其他当時の生徒数名」で、レッスン風景が描かれています。これを見ると、まず音階をいくつかの調で弾いた後、バッハに移り、生徒がちょっと間違えると、デフォレスト先生は「ミス小倉、おいそぎになりませずに、ゆっくりと御覧になってお弾きになりましたら、よろしいかと存じます」と助言をしています。次の課題として「この次にはこれのテーマをよく練習して、もしお出来になりましたら、暗記なさって下さいませ」と促しています。何とも上品で優雅ですね。続いて、「先生、その間に曲の本をあけて、丁寧に譜面台の上におかれる。小倉さん、曲をきれいに、ミュージカルに弾き出す」とありますが、それが何の曲だったかは、想像する他ありません。

では、お聞き頂きましょう。ショパン作曲〈ノクターン〉第12番、ト長調、作品37の2、演奏は同じく大学院音楽研究科2年生の水野絵理奈さんです。

(演奏)ショパン〈ノクターン〉第12番(5'19")

プログラム最後の曲は、19世紀のアメリカで大変人気のあったゴットシャルク(ないしはゴッチョルク)の〈最後の望み〉です。これは大正12年の関東大震災の後、被災者に布団を送るための活動の一端として、小倉末子が大阪中之島の公会堂で慈善演奏会を行った際に、舞台上で弾いて話題になった曲です。「[小倉] 女史が毎夜、母の祭壇に跪(ひざまづ)いて、祈るような心地で弾いていると云うなつかしい曲」と当時の新聞で報道されています。小倉末子はこの曲を1908年の春学期にタレー先生のレッスンで弾いていますが、それはちょうど小倉が母を亡くした時期でした。それから1923年まで15年に亘って小倉を支えてきた秘蔵の曲を、特別に披露したものでしょう。新聞の続報では、「主催者より小倉女史に対し演奏料を送ったところ、同女史は、寝具費の中に入れてくれと言って辞退した<sup>⑩</sup>」と伝えています。隣人に仕えるという精神をよく体現していて、女学院の卒業生としての面目躍如とすることができます。

では、お聞き頂きましょう。ゴットシャルク作曲〈最後の望み〉作品16、演奏は浅井久視子さんです。

(演奏)ゴットシャルク 〈最後の望み〉 (7'00")

今日は1860年製のスクエア・ピアノで、明治期神戸の演奏曲を7曲聴いて頂きましたが、如何でしたでしょうか。

このピアノは現在、「初期神戸女学院」の授業の中で、年に一度、大学院音楽研究科の1年生によって演奏されています。11月に一度調律して、院生が練習を重ね、12月半ばの授業で、履修生を前に演奏を披露するという形です。全く弾かないのも、また弾き過ぎるのも楽器を痛めますから、年に一度の健康診断のようなものです。

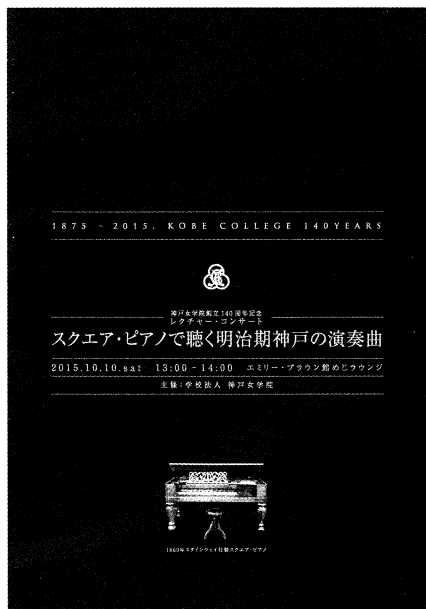
この楽器がいつまで演奏できるか、それは誰にも分かりません。毎年、今年が最後かもしれないと思いながら、10年目を迎えました。ひょっとすると「一期一会」かもしれません。しかし、たとえこの楽器が壊れても、このピアノを提供してくれたチャイルズさん、献金して送料を工面してくれたモントリオー

ルの婦人会の人々、尽力されたラドフォード先生を始め、このピアノを大切に受け継いできた代々の人々の思いを受け継ぎ、それを伝えていくことが、この学院に連なる者の責務と存じます。伝統とは、何より先人の精神を引き継ぐことであると思います。皆様もどうぞ、今日の響きを記憶に留めて、神戸女学院の歩んできた道のりと、これから歩いていくべき道のりとに思いを馳せて頂ければ何よりです。

今回、「初期神戸女学院」の授業の教科書として『山本通時代の神戸女学院』<sup>⑪</sup>を出版しました。先月出たばかりの新刊で、スクエア・ピアノや小倉末子の写真も載っています。ラウンジを出たところでお求めになりますので、まだお持ちでない方、興味を持たれた方は、どうぞお帰りの際にお手に取って御覧下さい。

では、最後に本日の演奏者を改めて紹介しましょう。神戸女学院大学大学院音楽研究科2年生で、アルファベット順に、浅井久視子さん、古川莉紗さん、楠原結実さん、水野絵理奈さんです。

それでは、これでお開きと致します。最後までご清聴下さいまして、ありがとうございました。<sup>⑫</sup>



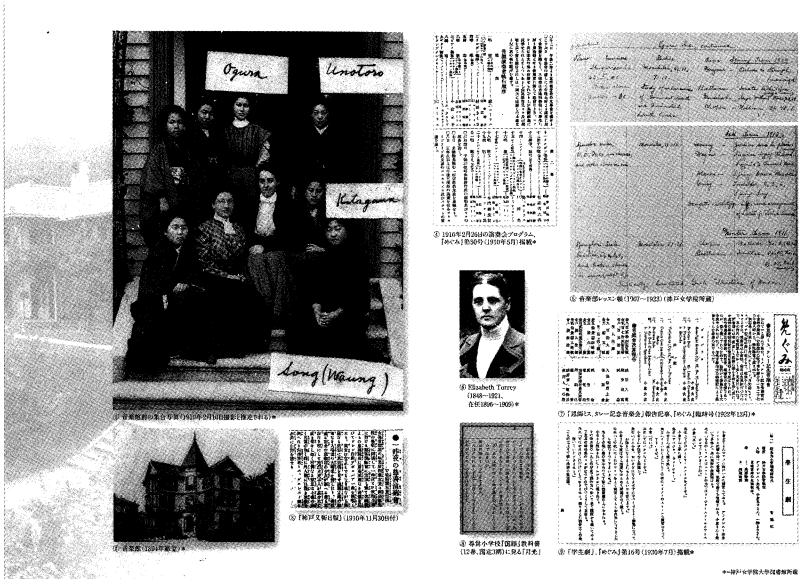
⑫  
プログラム

## 註

- ① 通常の88鍵の場合、音域は7と4分の1オクターブ(A0~C8)。
- ② Mary Radford (生没年不詳、在職1889-1890)。
- ③ C. B. DeForest, *The History fo Kobe College*, Nishinomiya, Japan, 1950, p.27-28.
- ④ David Rowland, 'Pianos and pianists c.1770-c.1825', in *The Cambridge Companion to the Piano*, ed. by C. Rowland, Cambridge U. P., 1998, p.27.



- ⑤ 岡田晴美先生からの聞き取りによる。
- ⑥ 神戸女学院『学院史料』第11号(1993)巻頭グラビアに修復披露時の写真が掲載されている。
- ⑦ Elizabeth Torrey (1848-1921、在任1896-1909)。
- ⑧ 1910年3月卒業。
- ⑨ Charlotte Burgis DeForest (1879-1973、在任1905-1950、1915-1940は院長)。
- ⑩ 『朝日新聞』1923(大正12)年11月22日(木)東京版(夕刊)2面7段掲載。
- ⑪ 津上智実編、日本キリスト教団出版局、2015年9月5日発行。
- ⑫ プログラムのデザインは舟越一郎氏(Funaco Design)。
- ⑬ 本稿は、2015年10月10日(土)にエミリー・ブラウニング館めじらウンジで行なったレクチャー・コンサート(60分)の解説原稿である。



プログラム資料面

(音楽学部教授)